

『今、浦学にできること』 in Cambodia

# カンボジア浦和学院スクールプロジェクト vol.5

ប្រទេសកម្ពុជា អង្គការជាតិ សាលា គំរោងការ

— 広げよう国際交流の輪 —



25.7.5 ~ 7.9



国際教養の一環として推進しているカンボジアプロジェクト。5回目となる今回は、本校から養護教諭の工藤と、事務職員の遠山の2名が参加した。

毎回欠かさず訪問しているクヴィアン小・中学校、孤児院で子どもたちと触れ合い、二人が感じた感想、レポートは以下の通りである。



## クヴィアン小・中学校

クヴィアン小・中学校に、お土産の体重計とお皿を持って訪問した。今回は、工藤教諭が携帯型心電計を使った心電図の測定を第3回訪問時同様、子どもたちを対象に行った。先生方の呼びかけですぐに集まる子どもたち。真剣な表情で説明を聞き、測定中も騒いだりすることはなく、非常に協力的で行儀もよかった。カンボジアでは昨年、原因不明の病気が発生し、多くの子どもたちが亡くなっている。医療技術が発展途上にあるこの国で、心電図の継続的な測定により、病気の早期発見など、少しでもお役にたてればと思った。

その他、授業風景も見せていただいた。笑顔の子どもたちが多く、学校に通えること、勉強ができることに喜びを感じている姿に、思わずこちらも笑顔になり嬉しくなった。ただ、問題点は、先生の本数が明らかに足りていないという。先生の中には、他の仕事と掛け持ちのケースが多く、授業に急遽来れなくなることもある。そんな時、日本から派遣されている元気村グループの石川氏がボランティアで日本語・英語・情報の授業を行っていた。

日本の子どもたちにとって、学校があること、通うことが当たり前となった今、学校は「学びに行く場所」ではなく、「義務的に行かされている場所」となってしまう、自ら学ぼうという生徒が少なくなってしまうように感じる。それに比べ、カンボジアの子どもたちは学校に行けることに喜びを感じ、自ら学ぼうとする意欲は、日本の子どもたちよりも遥かに上のように感じた。もし、日本の子どもたちも自ら学ぼうとする意志が強くなればなるほど、学力もより向上していくかもしれないと思った。どんなきっかけでもよい。「学ぶ・知る・話す」ことを楽しいと感じたときの気持ち、「新鮮な思い」に振り返る一瞬を作り、今自分の置かれている環境を今一度考えて欲しいと感じた。目を輝かせ心を躍らせて授業を受けるカンボジアの子どもたちの気持ちと現状が早く一致できるような環境になって欲しい。



↑ 放課後、子どもたちの遊びに混ぜてもらった。部活動も、遊具も無いが、仲間外れの子どもも無く、皆仲良く本当に楽しそうに遊びまわっていた。





## 孤 児 院 訪 問

カンボジア浦和学院スクールプロジェクトは今回で5回目。そして、欠かさず訪問させて頂いている孤児院。到着時には、いつものように入口付近で子どもたちが出迎えてくれた。車から降りるとすぐに手を繋ぎに来てくれる子、日本語で挨拶をしてくれる子もあり、クヴィアン小・中学校と同様、表情はとても明るく、人懐っこい。

前回訪問の際、ひときわ反応が大きかったお菓子のプレゼント。今回は飴を持参し、テーブルに広げて差し出すと、大人気であつという間に無くなってしまった。この日、院内では腕相撲大会が開催されていた。無邪気にはしゃぎ、応援する子、闘志を燃やす子、勝ちに喜び負けに悔しがると、全力での真剣勝負。そんな子どもたちの一喜一憂した姿を見ていると逆にこちらまで元気を頂いた。少し体を動かした後は、お腹がすくころ。あらかじめ買い込みを済ませていた食材を使い、年長の子どもたちと一緒にカレー作りを行うことができ、協力して作ったカレーはとても美味しくみな喜んで食べてくれた。

帰り際には、子どもたちが日本の歌を含む3曲を披露してくれ、我々の姿が見えなくなるまで見送ってくれた。孤児院の滞在は2～3時間と短い時間だったが、子どもたちにとってこの時間が少しでも「楽しい」と感じ、有意義な時を過ごせたと感じてもらえていたら嬉しい。

## 交 流 会



クヴィアン小・中学校の先生方他カンボジアの皆さんと韓国にある大田保健大学の皆さんとの交流会に参加させていただいた。ボランティアでカンボジアを訪問中の大田保健大学は、クヴィアン小・中学校で検診を行うなど、これまでの活動に対し、カンボジア教育大臣より感謝状が贈られた。

食事後、カンボジアアーティストの歌に併せてのダンス、集合写真撮影と続き、学園理事である神成会長理事の挨拶を以って閉会となった。

